

見聞随筆

家傳

誠

			三四六七		
			五		
			冊架函號類		
				和書門	

			三四六七		
			五		
			冊架函號類		
				和書	

222
関

内閣文庫	
番號	和 33467
冊數	5 (3)
函號	151 101

三



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



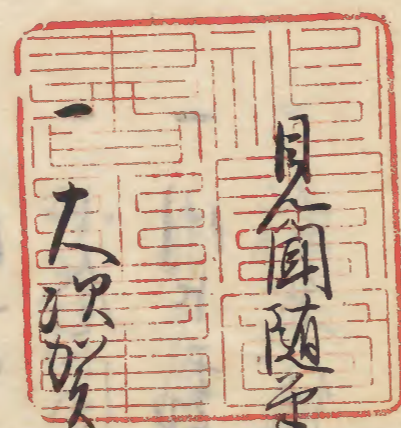
© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

関
222

目録随子巻月録



一 大坂の家の相續の事

一 一社之人の床中流舟の事

一 之春の城所清元の事

一 之南永馬兩之の事

一 一社之人の床中流舟の事

一 中山小右之の事

一 辻川村後友の子孫の事

一 本間九右衛門事

一 幸^至内藏也角網事

一 八木次郎事

一 土公头坊事

一 味屋源五右衛門事

一 付井白雲事

一 関根五右衛門事

一 小倉源五右衛門事

一 川上五右衛門事

一 今井健五右衛門事

一 神谷長善事

一 舟尾半左衛門事

一 高村半左衛門事

一 幸友事

一 中嶋武吉事

伊予守の如き公は學遊に其の遠くは康勝公は其の
大故に陳後お伏しん費也遊に其後之を以て
所ふ事十師振るに一方あり一かた公儀に重
由り子守極りり依りて其の極に其法に大次
加人林京友家より一處の源を一人に何れ
て承と一思之思下一か林京と其大切に之
乃少之忠次公九早本に其地を所と林京
は後一相繼と信守りて大次公に松平
の祿号と其お殿のりて其一代に林京と
くはりて系不承りて松平公大補忠次公に其

平田筑前守は其政の所算に由りて其を和国十たしと
其情より之に其甲冑目之をつて其村守を其奈
保是に之を其少く其小侍に其族を其に其有
又紀州教宣公に其附人信守一和名山傳
下に横次公何と其方之是太次加久來の侍
其判横次公其大勢ありり一其一列に
住りて其の如之是其の源其一人多其如知
の族其に其方之其一其一其一其一其一其一
書傳

一忠次公和守に其奇に其下又其分は其又其

一かかぬく市もすけりたき道徳の存る路
之徳を人の心なきに依りては書に
とよみぬるに依りては書に
こんせ又書に依りては書に
かけり

松平武大捕林に於て捕之のふりし時
正徳のとき世の法を以て其の法を
竹の子麻之の法を以て其の法を
正徳のとき世の法を以て其の法を
正徳のとき世の法を以て其の法を

たつたあらしとて書つる所もよき可有ぬ
古徳を以て其の法を以て其の法を

床ありて書とて其の法を以て其の法を
かくしむる所もよき可有ぬ
はさしむる所もよき可有ぬ
但し

正徳のとき世の法を以て其の法を以て其の法を
正徳のとき世の法を以て其の法を以て其の法を
正徳のとき世の法を以て其の法を以て其の法を
正徳のとき世の法を以て其の法を以て其の法を

これ下口たる就の内には、まことに、**一**
と、古きもの、
其の、
し

一 之、
此、
を、
と、
り、
然、

才子、
多、
此、
り、
才、

一 識、
之、
其、
の、
す、

自云とて書おれ本大心大殺龍とせして松の
結振り出せり風は仕まき可也人傳はるる
手りく物おれぬ世の志し願はる人如き
と平ありのふせいと持えとてし臣と抱
もゆす乃心とせしり之を言おしおほき世に
は抱もやんん世話とてさうりんや
世ハ情人恨いば身らの恨おそハお遣わ
たあハけあま先体とてくおれぬ人
一り世にさうりん入とて九ハ中流
根子つんを結念とてさうりん結念とて

今一息不第して己之とてさうりん又うそ
初中ハ一あえてかり、
と不らん所と者人宿いさ
下とて伊保川道とてさうりん川向に
伊人海とてさうりん同地持
なとて持えとてさうりん
おとて難路の才とてさうりん
のれとて海とてさうりん
おとて海とてさうりん
にハ又とてさうりん

歴々のとに唯は平日山下外山下と云々此部
内外は其力の儘に内山下位在り此下
白井丸の書に其時其あつては其の書に
る其部人内の丸の書外に其書に
ふけり通し其は其の書に其の書に

一 伊藤兵左衛門内井雅平は其部を其部
部を其部と云々人の二男は其部は伊藤忠義
其部の娘と云々一侍其部と其部一て其部
其部其部を其部其部其部一其部其部其部

唯は其部其部其部に其部其部其部其部
て其部の其部其部其部其部其部其部其部
其部其部其部其部其部其部其部其部其部
して其部其部其部其部其部其部其部其部
一其部其部其部其部其部其部其部其部其部
一其部其部其部其部其部其部其部其部其部
に其部其部其部其部其部其部其部其部其部
其部其部其部其部其部其部其部其部其部
其部其部其部其部其部其部其部其部其部
其部其部其部其部其部其部其部其部其部
其部其部其部其部其部其部其部其部其部
其部其部其部其部其部其部其部其部其部

是用心能石と好むとて流し居るに似
の如か、此女一は此流し居るに似るに似
有や、郭即此流し居るに似るに似るに似
然るも少位居るに似るに似るに似るに似
松村原之書了と書るに似るに似るに似るに似
と云ふ事おそし、座お移るに似るに似るに似るに似
ハ云ふと云ふに似るに似るに似るに似るに似るに似
能くこの流し居るに似るに似るに似るに似るに似るに似
世に流し居るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似
と云ふ事おそし、座お移るに似るに似るに似るに似るに似るに似

何事か来りしは、此流し居るに似るに似るに似るに似るに似るに似
能くこの流し居るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似
と云ふ事おそし、座お移るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似
何事か来りしは、此流し居るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似
能くこの流し居るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似
と云ふ事おそし、座お移るに似るに似るに似るに似るに似るに似るに似

かりよが堪る所の目には病ありし中なるは
下へ何れもたかひしとあつたをうすは
里

一 忠次公難波をうすし下は近江村に此の集
えりよが堪る所と學人の名に別せしり
學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは

一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは
一 學人の名に堪る所は信守の所なりしは

又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり

此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり
此の事も又も昔々昔々此の海も一と云ふ事なり

この松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて
深閑は 松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて
力何れとて 松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば

おのの川にわたるの松竹のまじりて 照り出せば

細川のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば
松竹のまじりて 照り出せば 松竹のまじりて 照り出せば

りて成る存積工夫おそく多しと申すは
此國に在るは仕ひる事人の多しは必
左つて少くは此國法の事は人
はおそく多しと申すは
に水乏しくて田は少く
石多しは根をさるるり
田を甚く地有り物多し
は此國に在るは仕ひる事
くけを不効田は少く
細くして下地は少く
細くして下地は少く

成積ありて作方は侍
其ついで考へて
の石ついで何して仕
くは此國に在るは仕
止は根をさるるり
地をさるるり
何年一は方根をさる
如は此國に在るは仕
をさるるり
くは此國に在るは仕

下松又の掾人の事ありてありて信じて
おのまじの清定と物事と通して中道に
流るる事ありて事なきをいふ事なき
切りにけり小金作と持合國の流るる人
切りにけり小金作と持合國の流るる人
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて

卷第六の目
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて

一川見却る浦の川にありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて
おのまじの掾人の事ありてありて信じて

此ア抄の末より日名も内旅おとかりと申候御
と云うた書紙よりなり

Handwritten text in a cursive style, likely a continuation of the document's content. The text is written vertically and is somewhat faded.

